

沙雅ゆう子
精神病棟



沙雅ゆう子

昭和21年東京に生まれる。本名、後藤政美子。共立女子大学卒業後、日本女子大学修士課程、実践女子大学博士課程を終了。

芥川龍之介を研究。「輪」同人。

現住所——143 東京都大田区池上7-29-17

短篇集 精神病棟

1974年12月 1 日 発行

＊

著者 沙雅ゆう子

製作 中央公論事業出版
東京都千代田区丸の内2-4-1
電話03-201-1121

＊

印刷 松濤印刷

製本 中條製本

＊

定価 850円

精
神
病
棟

精神病棟 ■ 目次

エピソードからの序章 7

シンボルの葬列 23

シネマ讃——女と男と女—— 44

「シネマ讃」のために——ノートの、あるいは談話風に——

63

焦点を探せ 69

「焦点を探せ」ノート 80

短い即興物語 83

四重の交錯 89

「四重の交錯」ノート 109

人魚の靴型 111

シェラザードの誘い 127

精神病棟——または、F・サガンの『毒物』的状况——

173

あとがき 187

エピロオグからの序章

クロノス
時間は無限に続く——その終りのない空間に蟻のごとく細やかな抵抗を試みる。

それは果てしなくXという脳髄の中でのみ回転していく。が、時間の神は葡萄酒を片手に超然として通り過ぎて行く……。

奇怪にひび割れて壁土がポロポロ溢れている油っぽく黒ずんだワックス塗りの階段に足をかける。

一足ごとにギンギシと軋る音。踊場まで上り詰めると、錆びた真鍮の把手の付いた古めかしくて部厚いドアが見えて来る。

そのドアの前に立って、傷だらけのでこぼこした木肌をひと撫ぜしてガチッと把手を右に回しドアを静かに開ける。ドアの重みが体全体に伝わる。

ギンギシと床の鳴る音。

ひと固まりの集団のうち私に近いほうの三、四人が億劫に首を回して数秒遠方の私を見る。無表情というよりは白さを感じる。一体誰なのだろう、この人たちは。

いつも眺める漆喰の天井のセピア色のしみも湿った陰鬱な雨で薄暗闇に掻き消されている。靴跡の付いたアジビラが一枚ワックス塗りの油っぽい床に皺寄って横たえている。

ああ 節をしまって つらいのは

ホームシックのブルースだ

泣きだすまいと がんばって

ぼくは 口を ひらいては 笑うんだ

〈ラングストン・ヒューズ〉

パンパンと手を打つ澄んだ音。

「だめ、だめ、いくらセリフでもそれじゃあ単なるセリフだよ。

フィードバックがないんだ、まったく！」

輪の中央のTという学生演出家は苛立ってしきりに頭を掻いている。

今年の梅雨は長い。憂鬱な、とても

私はゆっくりギシギシと床を鳴らしながら歩いている。

この床はなんて軋むのだろう。

古めかしい錆びた鉄棒の窓と床の他なんにもないだっ広い部屋。
私はつとワックス塗りの黒ずんだ床をみつめてゐる自分に気付く。——軋む床を。

私はまだ床をみつめてゐる。

床は飛び散った試験管のガラスの破片の粒子でキラキラしている。黄色い液体。私は破片を拾おうともしないで黒ずんだ塵が浮いている床をみつめてゐる。

「君とは結婚しないよ」

Tは形のよい顎の近くで試験管を振ってはしばらくみつめてメモをしている。

一瞬私の顔が醜くゆがんでひん曲がるのを感じた。

黄色い液体。ブラッときつしり詰まって並んでいる試験管やビーカーの行列はみるみる黄がかって来た。

黄疸のような視界。机の上の鮮やかな紅薔薇の一輪が黄に変色して喘いでゐる——。

五時を告げる鐘が鳴る。単調にもものうく。

助手の私は実験室を一廻りしてドアに鍵をかける仕事が残っている。が、私は廊下に立ちつく

して色あせたガリ刷りの脚本をみつめている。

ドアの外で――。

ドアの外にまだ締め出されている。Eさんの次はKと私。私はギョッと脚本を握りしめている。Tの自称アンチ・ドラマ。私に割り当てられたセリフはたった一言、「ああ、本当に」である。しかし、一シーンに十三回プラス一回も発する。

ある回には辛辣に。

ある回には悪魔サタンのように。

ある回には快活に。

ある回には傲慢に。

ある回には退屈に。

ある回には優しく。

ある回にはいたずらっぽく。

ある回には痴呆のように。

ある回には無邪気に。

ある回には愛想よく。

ある回には悲痛に。

ある回には無表情に。

ある回には神の^{ゴッド}ように。

そして最後に狂気して叫ぶ。

「ああ、本当に」

——ただこれだけのこと。へああ、本当に、としか言わない白痴娘の役。

「うまくやってくれよ。一つの主題のトーンが流れているところだからね」

ドアが開く。

「次はKさんとSさんの稽古の番だよ」

登場人物

アル中患者の娼婦——娘盛りと、中年の間

白痴娘——童顔の二十歳から二十五歳の間

繁華街の場末

酒樽やウキスキー瓶が詰まっている木箱などで狭苦しくなった倉庫めいた空地にかりうじてベッド一つと小さな化粧台が置いてある。

けげばしい羽飾りが付いた赤や黒のドレスが二、三着ベッドの上に投げかけてある。
やや上方の小さな窓にストッキングがぶら下がっている。

夕方。娼婦はたった一つしかないぼろがはみだした椅子に腰掛けて鏡に向かって化粧している。
ルージュ。口紅。その周囲を白痴娘はうろろしながら何かぶつぶつぶやいている。

全体に黒っぽいヘニグロっぽい感じを出すこと。
ラジオから音楽が流れている。ゴスペル・ソング。

Steal away Steal away

Steal away Steal away

You know

That I haven't got long to stay here

My lord he calls me,...

「この場面設定はわかったね。どうしてここにいいのか、どうしてこうやって生きているのか、
からない無知な娼婦の役なんだよ。Sは、同じ音、同じ調子で発しているんだが、A、B、C、
それぞれの人によってニュアンスは異なっているという流動性を持ったセリフ——いわば、
ここでは娼婦の第二の影みたいなものさ、いいね」

私はおろおろしている。

Tのきびきびした声。

「違うよ、脚本を見たまえ」

私はうろたえている。

娼婦

あの人、あたいにドレス買ってやるよっていった。ピカピカしたビーズの付いたのを。

きっとあたいに似あうだろうって。

あの雑貨屋の一番奥にさ、ピカピカ光って眩しいくらいだよ。

あたはずうっと待ってんだ。

ヒイ、フウ……半年になるよ。もうじき来るね。二、三日したら、一週間したら、もうじき

……。

白痴娘

ああ、本当に。

「いや、そこは、快活にだ。退屈にはないんだよ」

娼婦

だけど、帰り際に

あの娘は抱きつきキスをした

おれの手をねじり泣いたっけ

あの娘のいうにはこのおれは

この世で一番よい男

なんて鼻歌まじりに歌って陽気に、バイバイ、ベイベーって行っちゃった。

いい娘ができたんだ、きつと。

白痴娘 ああ、本当に。

「違ふよ、もう一度。もっと悲痛に、みんな同じ調子だ。それじゃあ、セリフ音痴だよ」

ああ、ああ、ああ、ああ、ここには長くられない。

ああ、ああ、ああ、ああ、ここでは闇はわたしを捕えない。

私はおろおろして脚本を意味もなくめくっている。

私はかすかに小刻みに震えている。雨はまだ止みそうにない。Eは私を前にしてしゃべっている。

「ねえ、誰でも恋はするものねえ。そうじゃあなくて？」

にんまり笑ったEの顔の奥で破壊魔が舌をへろへろと出してほくそ笑んでいた。

ドアが開いた。屋根裏部屋のごとく入り組んで窮屈な部屋に入って来たKは誰かを探しているかのように落ち着かなかった。

彼女はKを目敏く見つけて、それじゃあ、また、と言って残酷な笑いを浮かべ、狙いを付けたKに近づいて行った。いとも優雅に。そして、忍びやかに獲物は捕えられた。